

令和 2 年 6 月 17 日現在

機関番号：34504

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K02833

研究課題名(和文) 統語的融合とフレーズ化にもとづく英語の柔軟性・変則性を示す表現・構文の実証的研究

研究課題名(英文) Empirical research on elastic and idiosyncratic English expressions/constructions in terms of syntactic blends and formularization

研究代表者

住吉 誠 (SUMIYOSHI, Makoto)

関西学院大学・経済学部・教授

研究者番号：10441106

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究課題は、英語の柔軟性・変則性を示す構文や表現を実例にもとづいて実証的に考察した。扱った現象は、have long V-ed 構文、try の二重動詞構文、common タイプの形容詞パターン、added to that のフレーズ接続副詞などである。それらの表現・構文は、複数の単語の連鎖が固まったフレーズであり、これらをフレーズ化や統語的融合という観点から考察した。これらの表現・構文はそれを構成する語の規則からは解放された、それらとは異なった振る舞いを見せる。これらのフレーズが持つ柔軟性や変則性を指摘しながら、フレイジオリジーの考え方が英語の記述的考察の深化に有効であることを示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究課題の意義は、以下の3つである。(1)これまであまり知られていなかったような英語の柔軟性・変則性を示す表現や構文の実例を多く収集して研究対象としたことで、英語の多様性を明らかにした。(2)個別の変則的事象を考察対象としてその振る舞いを明示的に示し、使用動機などを探っていくことで、変則性の研究は決して周辺のなものではなく、英語研究の深化に貢献できるものであることを示した。(3)複数の語が連鎖を成し固まることでフレーズ化するという、フレイジオリジーの考え方が、英語の実証的研究の道具立てとして優れていることを示し、さまざまな構文や表現の考察を深めて英語の記述的研究の進展に貢献した。

研究成果の概要(英文)：This study empirically investigated English expressions/constructions showing elasticity and idiosyncrasy. This study delved into phenomena such as the "have long V-ed" construction; idiosyncratic verb/adjective patterns including "try + V" and "It is common + that-clause"; and phrasal connective adverbials (e.g., "added to that"). These expressions/constructions are fixed sequences of words (i.e., phrases in phraseological terms). Their syntactic and semantic behavior was thoroughly explored, based on manually collected data and data from corpora. After they were investigated in terms of syntactic blends and formularization, it became clear that these phrases are emancipated from (or behave differently from) rules tied to each of the words that constitute the phrases. By showing and explaining such elastic, idiosyncratic aspects/characteristics of the phrases, this study advanced the descriptive study of the English language.

研究分野：英語学

キーワード：変則的表現 フレイジオリジー

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

(1) [英語の柔軟性・変則性への気づき] 近年の英語研究では、研究データをコーパスに求める傾向が一層強くなっている。特に認知言語学が usage-based の考えを取って以来、理論的研究においても実例の価値が見直されるようになった。実例を詳細に検討することで、従来の、直観によるデータではとらえきれなかった英語の多様な姿が次々に明らかにされていた。多様な英語の姿の中には、規範的な観点から、または言語学者の直観にもとづく判断から、これまで非文と判断されてきた形、存在しないとされた表現・構文などが含まれていることも多かった。Manning (2003)、Aarts (2007)、Pinker (2013) などでも従来の文法規則でとらえきれない英語の表現や構文が指摘されていた。しかしながら、まだ考察の対象となっていない変則的構文や表現は多く、さらなる発掘が必要であった。

(2) [柔軟性・変則性の持つ重要さの気づき] このような、英語の示す柔軟性・変則性は、従来は研究対象の埒外におかれていた。しかし、近年このような変則性こそ言語能力解明の鍵であると主張する研究者がでてきていた (例えば、Taylor (2012))。Taylor は、このような変則性を明らかにすることが言語能力解明の一助になると述べている。また、このような多様な表現や変則的表現は従来の文法規則では説明できない「定型性」を持っていることも多い。近年、言語の大部分がこのような変則性を持った表現や形で成り立っていることが指摘されていた (Hill (2000)、Siepmann (2008)、Taylor (2012))。柔軟性や変則性を示す表現や構文に納得のいく説明を与えることは、英語研究の周辺ではなく中心であり、言語研究に不可欠であると考えられるようになっていた。

### 2. 研究の目的

本研究課題は、英語の柔軟性・変則性を示す実例を発掘し、「統語的融合」、「フレーズ化」という考え方を柱にして、そのような柔軟性・変則性に納得のいく説明を与え、英語の実態解明の一助を目指すことを目的とした。

(1) [英語の柔軟性を示すデータの発掘] 英語を母語とする言語学者が時に指摘する、英語の柔軟性・変則性を示すデータは、直観で作られた例ではなく、すべて実例である。本研究課題の目的のひとつは、ペーパーバックなどを使用した実例の収集、大規模コーパスの徹底的な利用によって、これまで気づかれていなかったような、英語の柔軟性・変則性を示すデータの発掘を行うことであった。新たな表現や構文を発掘するだけでなく、そのような実例にもとづいてこれまでの言語学者・文法学者の意見と英語の実際の齟齬の修正を進めることを目的とした。

(2) [統語的融合とフレーズ化という考え方で英語の柔軟性・変則性へ説明を与える] 本研究課題では Barlow (1999) のいう「統語的融合 (syntactic blending)」と、近年ヨーロッパを中心に精力的に行われているフレイジオロジー (phraseology) の考えを利用して、英語の多様な構文や変則的表現に説明を与える試みを行った。「統語的融合」とは、X と Y が融合した結果これまで見られなかった Z という新たな形が生まれるという考え方で、英語の柔軟性・変則性を説明するうえで非常に有効な考え方となる。語の連鎖の研究であるフレイジオロジーでは、いくつかの語の連なりが新たな変則形を生むことに注目しており、本研究課題に発掘した多くの変則例をフレーズ化という観点から説明することを試みた。

### 3. 研究の方法

本研究課題は実証的研究であり、手作業やコーパスで収集した例にもとづいて考察を行った。コーパスは大量のデータを含んでいるが、変則性や柔軟性を示す構文や表現は、コーパスの検索アルゴリズムでは拾い上げることが難しいものも多い。特に、連鎖がフレーズ化する際に、フレーズを構成する語と語の間に、数語からなる別の語句が生じる場合は単純な検索では当該例を拾いきれない。そこで、本研究課題の柱となるものは「実例からコーパスへ周る」というものであった。やみくもにコーパスの検索をするのではなく、まずは徹底した手作業による実例収集、研究書などからの構文の収集を行った。それらの観察から、分析すべき構文や表現の形を把握したのちコーパス検索を行い、研究対象となる現象の実例の数が十分なものになるように増やしていくという手法を採った。これにより、関係する例をできるだけ広範に収集し、一方で表面上の形は似ているが無関係な例を排除することが可能になり、データの質をできるだけ一定のものにすることができた。

また、統計的な手法を縦横に駆使して分析するのではなく、定量的な考察はある程度の参考にとどめ、出てきた実例を徹底的に読み込み、意味の観点から深く考察することで、数値データでは把握しきれない、言語使用における意味的な動機を探った。それにより、単に「X の形が Y の頻度で生じる」といった指摘にとどまらず、どのような意味的な動機づけがあれば X の形が生じやすいのか、どのような表現意図に支えられて X の形は使用されるのかといったような、より深化した説明を提示するように努めた。その意味において、本研究課題が採った方法は、意味の実証研究である。

#### 4. 研究成果

本研究課題の細かな成果を(1)~(4)に、それら個別の考察から導き出される大きな意義を(5)~(7)に述べる。

(1) [have long V-ed 構文に見られる変則性の考察] 当該の構文は、類似する have V-ed for a long time の形には見られない変則的制約を持っている (Hilpert 2014)。例えば I have known your father for a long time. / I have read this book for a long time. は可能な形であるが、後者を I have long read this book. とすることは不可とされる。この変則性については、それを指摘した Hilpert も説明を与えていなかった。本研究課題では、手元およびコーパスからの事例にもとづいて、この構文に生じる動詞の意味的特徴、名詞主語の特徴などを明らかにした。当該構文が同種の行為の繰り返しを時間の長さに変換して言語化する、総称的な読みを持つ構文であることを指摘し、単純な事態を示すような内容を伝えることができないという変則性を持つことを明らかにした。

(2) [動詞のパタンに見られる変則性を示す例の発掘と考察] try、assist などが取る原形不定詞構文 (例: Try increase your stamina... / ... assist parents develop...)、disagree、miscalculate が従える that 節補文について考察を深め、そのような変則性を動機づける要因を実証的に考察した。このような動詞の変則的構造は、統語的融合の観点から考えることが可能な場合もあれば、フレーズ化の観点から説明を与えることも可能である場合がある。また、動詞が that 節を取る構造に見られる、二重 that 構造 (例: We think that if we do that with an amnesty again as part of a package, that, once again, we will be sending the wrong message.) を取り上げ、その変則性が生まれる要因を、トピック性という語用論的観点にもとづいて明らかにした。補文標識 that に挟まれる要素は談話上トピックの役割を果たす既知情報であるため、話者が伝えたい情報を示すため二度目の that 節を置くと考えられる。

(3) [フレーズ化による新しい表現の発掘と考察] to added to that / add to that / added to that という接続副詞表現を実証的に考察した。その成り立ちや変則性について議論しながら、歴史的には that ではなく this が使用されることが多かったこと、added to that の形は倒置構造と類似することなどに言及した。このような議論の過程で、これらの表現に使用される指示表現の変化 (this that) が他の接続副詞のその変化と類似する過程をたどっていること、これらの表現の成り立ちにはフレーズ化が関わっていることなどを明らかにした。

(4) [規範性と変則性の関係を見る common タイプ形容詞のパタンの考察] 規範的に不可とされる it is common that... のパタンが実際には使用されている実態を指摘し、それらの例を意味的な観点から考察した。典型的な it is common to V と当該のパタンは、共起する動詞の特徴の違いが見られること、common の意味をより精緻に分析する必要性などを指摘し、総称性の観点から、it is common that... のパタンの使用を動機づける要因を探った。

以上のような個別事象の考察から、本研究の意義を次のように述べることができる。

(5) [英語の柔軟性・変則性を示すデータの発掘] 従来あまり指摘のなかった、英語の柔軟性・変則性を示す構文・表現を発掘したことは、それ自体大きな価値があったと考えられる。特に、理論言語学のみならず辞書や記述的文法書などでも否定的意見が多く見られるような構文・表現が頻繁に使用されている事実を指摘し、それらを考察の遡上に載せたことは、多様な姿を持つ英語の認識の促進に貢献することができた。

(6) [英語研究への貢献] 本研究課題が対象とした、英語の柔軟性・変則性を示す表現や構文はこれまであまり注目されてこなかったものであるが、これらの事例を発掘し、その成り立ちに説明を加えたことで、他の典型的な表現や構文との類似性を明らかにできただけでなく、その特異性も明示的に示すことができた。このような個別の問題が、孤立した現象ではなく他の多くの事象とつながりを持ちながらも、それら独自の変則性を内包していることを解明した。英語の持つ、体系性を志向する側面のみならず、創造的変則性を明らかにすることで、英語研究に大きな貢献ができることを示すことができた。それらの具体的な貢献の現れが本研究課題の内容も含んだ住吉・鈴木・西村 (編) (2019) である。種々の議論の過程で、不規則性の中にも規則性があること、変則性を持つ用法が次の世代の英語を形作ることを明らかにした。

(7) [フレイジオロジーの考え方を援用した英語の実証的研究の深化] 当研究課題で種々明らかにした英語の持つ変則的振る舞いをフレーズ化という観点から説明したことは、フレイジオロジーの考え方が英語の実証的研究の深化に役立つことを示したという点において大きな意義があったと考える。本研究課題で依拠したフレーズ化という考え方は、構文文法という構文化と親和性を持ち、理論的英文法研究にも少なからず貢献できたと考える。一方で、当研究課題で扱った現象の多くがフレーズ化で説明できるため、統語的融合の観点からの考察が一部の言及に留まり不十分になったという課題が残った。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 住吉 誠	4. 巻 1
2. 論文標題 派生語と補部の受け継ぎの関係 : <disagree/miscalculate + that 節>を中心に	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Journal of Corpus-based Lexicology Studies	6. 最初と最後の頁 1-12
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.24546/81010584	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件（うち招待講演 0件/うち国際学会 1件）

1. 発表者名 住吉 誠
2. 発表標題 「脱規範的」冗長構造をコンテキストから考える: 二重that 構造の場合
3. 学会等名 日本英文学会第90回大会シンポジウム第十一部門「話し手・聞き手と言語表現 語用論と文法の接点」
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 住吉 誠
2. 発表標題 語の派生と補文の受け継ぎの関係について
3. 学会等名 英語コーパス学会語彙研究会 夏季セミナー「コーパスと語彙2018」
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Makoto Sumiyoshi
2. 発表標題 The "have long V-ed X" construction as a device to covert repetition/continuity into a length of time
3. 学会等名 7th Biennial International Conference on the Linguistics of Contemporary English (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 住吉 誠
2. 発表標題 動詞のバタンに見られる変則性
3. 学会等名 日本英語学会第35回大会シンポジウム「慣用表現・変則的表現から見える英語の姿」
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 住吉 誠
2. 発表標題 フレーズ接続詞としてのadd to that: 文接続への示唆
3. 学会等名 日本英語学会第37回大会シンポジウム「破格構文・例外的現象から見える言語の一般的特性」
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 住吉 誠
2. 発表標題 common タイプ形容詞と it is X that... のバタンの親和性について
3. 学会等名 関西英語語法文法研究会第39回例会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 住吉 誠、鈴木 亨、西村 義樹（編）	4. 発行年 2019年
2. 出版社 開拓社	5. 総ページ数 249
3. 書名 慣用表現・変則的表現から見える英語の姿	

1. 著者名 石川 慎一郎、長谷部 陽一郎、住吉 誠	4. 発行年 2020年
2. 出版社 開拓社	5. 総ページ数 264
3. 書名 コーパス言語学の展望	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----